2012 年 3 月 5 日

京都市会議員　各位様

拝啓　日頃は京都市政にご尽力頂き、誠に有難うございます。

京都会館再整備基本計画およびこれに基づいて進行中の基本設計案は、添付資料に示したように問題を含む内容となっています。問題の殆どは、基本計画が密室で作られ、関係者や専門家の精査を経ていないことにあります。このような問題の多い基本計画を前提として計画を進めると、京都市の財産面・財政面・ブランド面で多大な損害が発生する蓋然性が高いため、次年度の予算枠における第一ホールの解体を見送り、基本計画を見直す時間を設けられますよう、ご尽力頂きたく、お願い申し上げます。

敬具

記

参考資料）　京都会館再整備基本計画およびこれに基づいて進行中の基本設計案の問題点
添付資料 1）2011 年 1 月 27 日付　日経新聞「日本のオペラ、来日公演など大幅減少」
添付資料 2）京都会館再整備構想検討に係る機能改善可能性調査（平成 19 年度）抜粋
添付資料 3）京都会館再整備基本構想素案（平成 22 年度）抜粋

以上

京都会館を大切にする会　代表　吉村篤一
京都会館再整備をじっくり考える会　事務局　西本裕美
連絡先　090-3926-4329（西本）　jikkuri.kyoto@gmail.com

参考資料

京都会館再整備基本計画およびこれに基づいて進行中の基本設計案の問題点

1. 世界の一流の総合舞台芸術は上演不可能

計画中のプランでは、奥舞台や袖舞台が無いか、または不充分であるために、2011年の「京都会館再整備に関する市民意見の募集」及び「京都会館再整備基本計画」において市民に対して説明された「世界水準の総合舞台芸術」が上演出来ない。進行中の「京都会館の建物価値継承に係る検討委員会」においても、舞台芸術を専門とする委員によって不可能なことが指摘されている。敷地計画に関連する根本的な問題であり、今後の修正では対応不可能である。

多額の費用を投入して整備するにも関わらず、京都市のブランドイメージ向上につながらない計画である。

2. 密室で計画されたために不備が多い

近隣の競合するホールの存在、後発であること、総合舞台芸術を取り巻く近年の状況の変化（受入可能な施設は増えたにも関わらず、海外団体来日公演は激減している、添付資料 2）を踏まえた計画になっていない。また、京都会館のこれまでの利用実績や周辺環境を分析して特色を出す計画にもなっていない。

基本計画が、限られた敷地に対して過剰なスペックを要求しているため、基本設計案が、要求された要素を詰め込むことに終始し、特色も工夫もないホールになっている。最近のホールは工夫を尽くしており、それらと比較して見劣りする。

基本設計案の第一ホールのホワイエが貧弱であり、ホールとしての品格に欠ける。幕間の時間の貧しさは、総合舞台芸術の場としても、国際水準の建築空間に慣れた観客を迎える場としても、不適格である。

ロビーや階段にスペースが充分配分されていないため、上層階客席からの避難を想定した防災対策としても問題がある。

3. 貴重な文化財と景観との調和を失う

京都会館は戦後建築史上重要な建築物であり、維持管理すれば国の重要文化財指定を受けるに相当する建築物であるが、現在の基本設計案では、京都会館の建物価値を継承出来ない。「京都会館の建物価値継承に係る検討委員会」の委員が難色を示しており、この委員会は計 5 回行って結論を出す予定であったにも関わらず、第 4 回目を終えても一向に意見の集約へ向かっていない。

また、景観への配慮が必要な立地における計画であるにも関わらず、駅前商業地や

郊外にあるホールと同水準の大きさを目安にしている。さらに、敷地が不充分な中で舞台高さだけを要求しているので、計画のバランスが悪い。1.で説明したように、緩和された高さが有効に使われない計画になっている。平成 23 年度までの京都市自身の検討にあったように、舞台内高さ 18～20 メートルで、現状のポピュラーミュージックのコンサート、バレエ公演等はカバー出来ると報告されている（添付資料 3、4）。極めて稀か、殆ど可能性のない演目のために、岡崎の景観の調和を犠牲にしようとしている。

4. 運営上の見通しが示されていない

同程度の施設の運用実績からは、建設後の運営費は、どんなに少なく見積もっても、年間数億年の増額になることが予想される。現状で稼働率が 76%あるので、稼働率の向上によって収益を上げられる余地が少なく、使用料の値上げ、市税からの充当、文化予算内の他の事業予算の削減等を誘引する可能性が極めて高い。

このような可能性のある計画にも関わらず、現状で運営費の見通しが示されていない。一旦建設された後は、長期に渡って費用がかかるため、建設前に運営上の見通しについて充分検討すべきである。

5. 市民に対する説明責任を果たしていない

2011 年 1 月の「京都会館再整備に関する市民意見の募集」では、第一ホールが解体されることは一切明らかにされず、現状の建物を維持改修するかのような誤解を誘う文章によって、意見募集がなされた。市民は第一ホールの解体について説明を受けていない。

以上

本件に関する連絡先
京都会館再整備をじっくり考える会　事務局　西本裕美
jikkuri.kyoto@gmail.com　090-3926-4329
http://www.jca.apc.org/jikkuri/

日本経済新聞

2011年(平成23年)1月27日(木曜日)

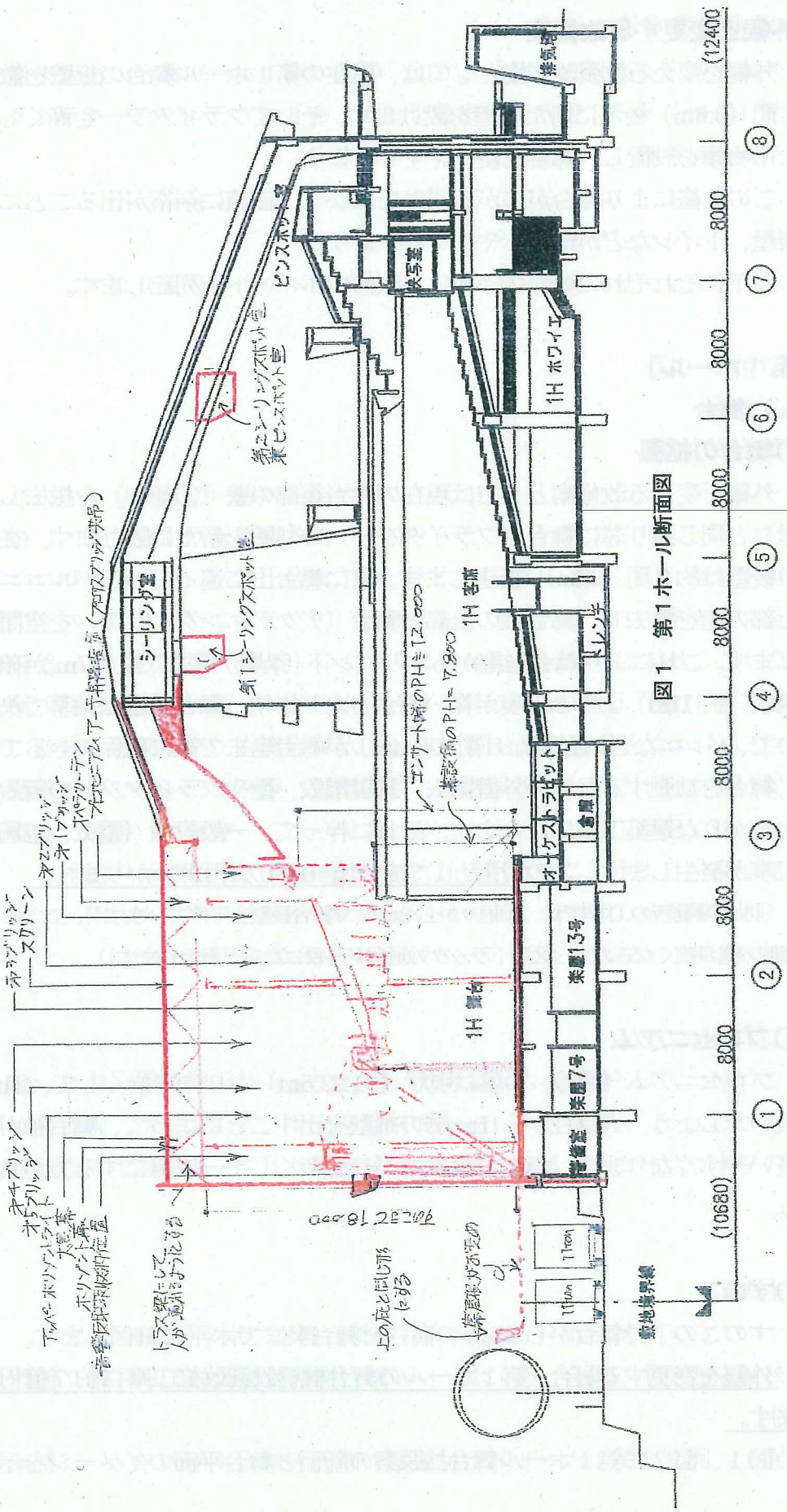
文化往来

日本のオペラ、来日公演など大幅減少

日本のオペラ公演数が減っている。昭和音楽大学オペラ研究所がこのほど発表した「日本のオペラ年鑑2009」によれば、2008年の1219回から、09年は988回へと20%近く減少。同研究所が1995年に調査を始めて以来、最大の減少率だ。

なかでも顕著なのが海外の歌劇場や音楽祭の来日公演で、08年の234回から、09年は71回と激減。調査開始以来、最も少ない数字だという。欧米やロシアの大規模歌劇場による首都圏での公演にさほど変動はないが、東欧などの中規模劇場が各地を巡演するオペラが減った。不況や自治体の財政難で、公共劇場が来日公演を受け入れられなくなっていると思われる。

一方、オペラを上演した団体数は08年の215から09年には245に増えた。客の入りを考慮し各団体が1演目あたりの公演回数を減らしたためで、この傾向は今後も続きそう。日本の代表的なオペラ上演機関、新国立劇場の今秋～12年夏の公演回数は1演目につきほとんどが5回。十数年前は7回公演もあった。藤原歌劇団や東京二期会も、少しずつ回数を減らしている。新国立劇場の尾高忠明オペラ芸術監督は「私自身は10回でも上演したいが、芸術監督に回数を決める権限はない」とチケット販売への配慮をにじませた。



京都市の依頼により音楽ホール専門のコンサルタント会社Light Stageが作成したもの。
音楽ホール専門家から見て、18メートルの舞台内高さを推奨している。

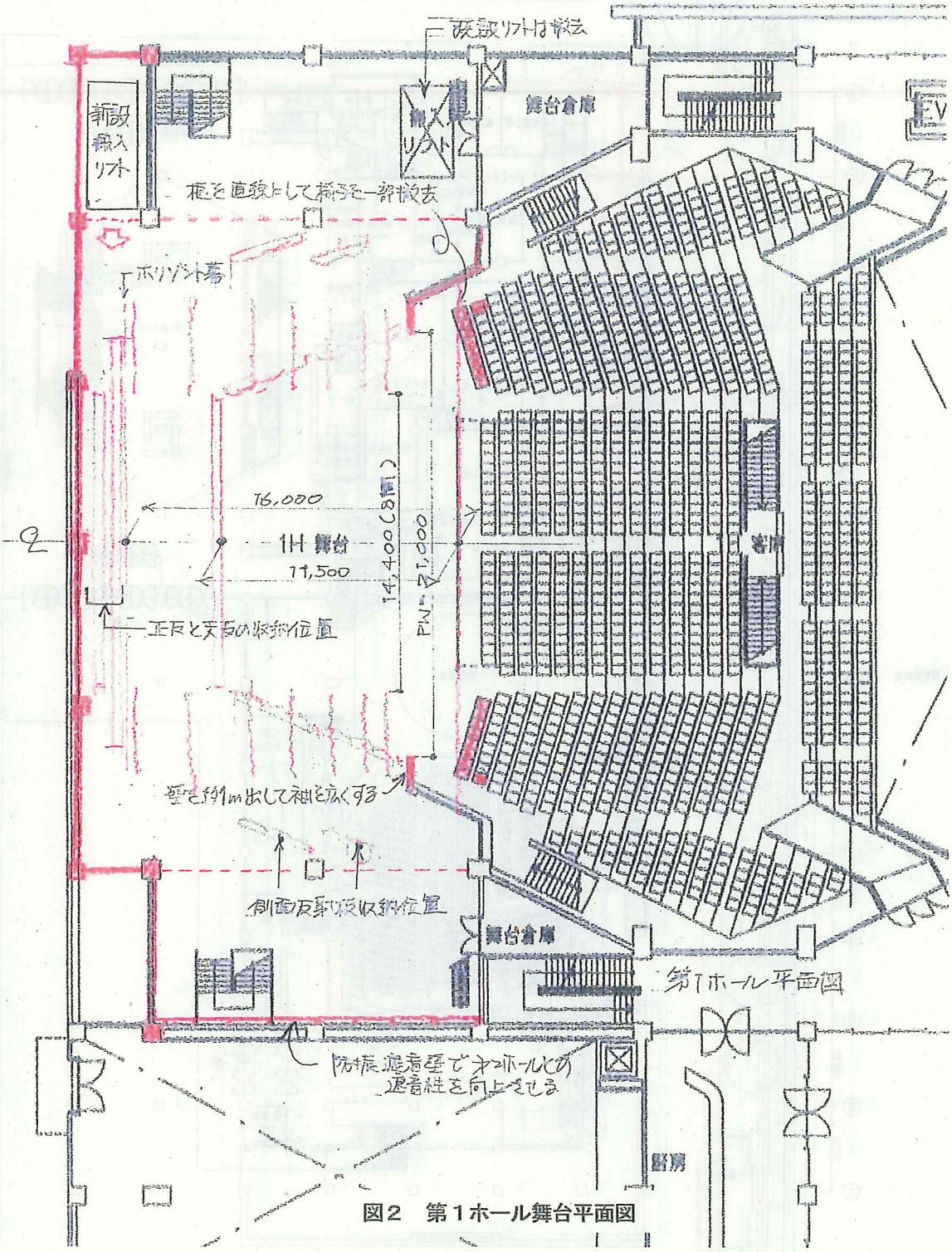
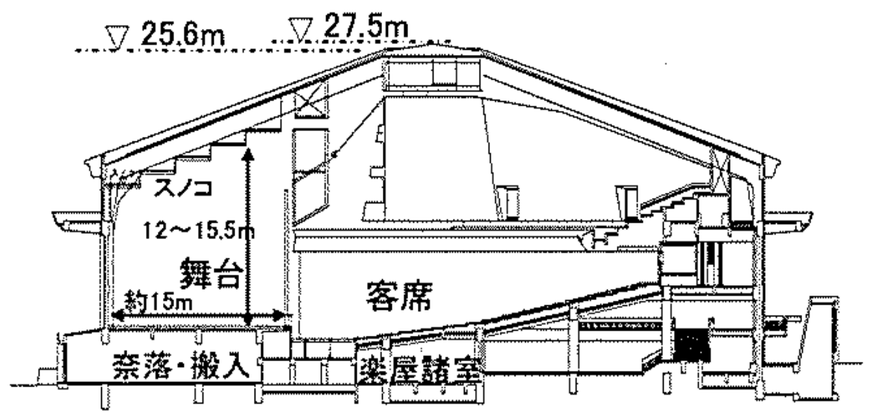
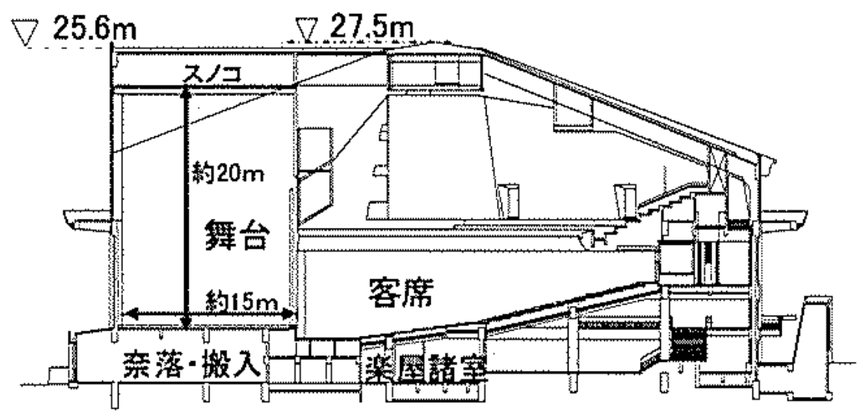


図2 第1ホール舞台平面図

○搬入口は位置を変更し、上手階段の1通りより西側にリフトを新設します。スパン 8m の間に設置できますので、6m 程度の長尺ものが乗せられるリフト設置が可能でしょう。搬入口に向けて、11 トントラックを西側に2台、北側に1台の合計3台まで置けますので、搬入と搬出の効率が大変良くなります。

京都市の依頼により音楽ホール専門のコンサルタント会社Light Stageが作成したもの。
音楽ホール専門家から見て、18メートルの舞台内高さを推奨している。

第1ホール 舞台機構等の比較検討表

＜比較項目＞	ケース①	ケース②
断面プラン	屋根形状は現状のまま	フライタワーを増設（建物最高高さ以内）、横幅も拡張した場合
平面プラン	舞台平面形状は、奥行きを拡張し、幅は現状のまま（奥側ほど狭まる）	舞台平面形状は、奥行きを拡張し、奥まで同一幅となるよう改善
断面図		
■建築面		
① 躯体・構造	◎ 250kg／㎡の床荷重に対応が必要。 吊物機構を支持する追加部材の軽量化に充分配慮しつつ屋根鉄骨梁の補強を実施。	○ 250kg／㎡の床荷重に対応が必要。 フライタワー上部架構は鉄骨で新設。壁面の荷重増が舞台背面側の外壁で大きく、外側の柱・基礎の補強が必要。
② すのこ（ぶどう棚）	○ 現状の屋根構造を利用して、吊滑車を取り付けるための段状ぶどう棚を新設し、バトン配置を見直し、かつ将来の増改修やメンテ性に配慮。（滑車は床面固定式）	○ 舞台より20m程度の高さに吊滑車を取り付けるためのぶどう棚を新設し、バトン配置を見直し、かつ将来の増改修やメンテ性に配慮。（滑車は上吊り式） 舞台奥ほど狭まる形状も改善でき、同一幅のバトンの設置が可能
③ 舞台上部の飛び切り	△ ぶどう棚の新設によりバトンの飛び切り寸法が縮小され、長尺物の幕・貼物の吊込みに現状以上に影響が生じる。	△ フライタワーの高さが増加する分バトンの飛び切り寸法も増加するが、プロセニアム高さに対しての高さが十分ではないため、長尺物の幕・貼物の吊込みには限界がある。
④ 舞台奥行き	△ 約15m、舞台前方への約3m拡張	△ ← （ケース①に同じ）
⑤ 舞台幅	△ 現状のまま、屋根形状に合わせて舞台の幅が奥にいくほど狭くなる形状となり、舞台背景が狭まるなど、舞台利用上影響がある。	○ 舞台上部の改修により、奥にいくほど狭くなる形状が改善でき、間口と同一幅の背景や装置が置ける。
⑥ オーケストラピット	対応無し or 組み立て式	← （ケース①に同じ）
■舞台設備面		
① 吊物機構	○ 段状ぶどう棚の新設及び吊物機構の全面改修により、バトン配列の見直し、バトン本数の増設、吊り荷重のUP、操作性の改善等の効果が期待できる。	○ ← （ケース①と同様の効果がある） フライタワーの横幅を拡張することで、バトン長さの拡張、側面反射板の格納スペースに利用、袖見切りの設置などにより自由度のある吊物計画が可能。
（道具バトン数）	約20本を想定	約30本を想定
② バトン駆動方式	手動でも電動巻き取りでも対応可能。ただし、手動の場合は、綱元の設営が現実的には困難（舞台下手袖に移設した場合、舞台床下までピットが必要）	手動でも電動巻き取りでも対応可能。手動の場合でも、袖舞台もフライタワーと同じ高さとすることで、下手袖に綱元の設営の可能性あり。
■運用面		
① 演目の対応	△ 基本的に現状の使い勝手の範囲内での運用。 （音楽劇、芝居、ポピュラーコンサート、クラシック共通）	○ ケース①に比べて大型の舞台セットにも対応可能で、演目の規模・演出の自由度は大きく向上する。
② 演出の規模・自由度	△ 基本的に現状の使い勝手の範囲内での運用となるが、舞台機構の改修によりバトン本数の増設、吊り荷重のUP、操作性の改善等は可能。	○ ケース①での改善案以上にバトン本数の増設、良好なバトン配置、吊り荷重のUP、操作性の改善等により演出の自由度は向上できる。
	△ 大型の舞台セット、長尺物の幕・貼物のセットが不可。	○ 大型の舞台セットにも対応可。 （長尺物の吊込み・昇降には制約あり）
	△ プロセニアム高さに相応しいフライタワーの高さがないため、諸幕・貼物などを舞台上部に完全に飛ばし切ることができない。	△ プロセニアム高さに相応しいフライタワーの高さがないため、諸幕・貼物などを舞台上部に完全に飛ばし切ることに難あり（舞台開口部内に裾部が残る。プロセニアム高さが8mの場合は飛ばしきることが可能。）
③ 音響反射板の作業性	△ 天井・側面・正面の分割構造で、手動による組立て作業が伴い、人力と作業時間を要する。反射板移動軌跡に干渉する幕等の介錯も必要。	△ ←ケース①とほぼ同じ
■考察	△ 1)ぶどう棚・ギャラリーの新設により、①吊物装置の将来的な増改修や日常のメンテ性へが向上、②持ち込み装置の仮設吊り等にも対応可能、③バトンの電動化により従来以上の舞台演出の自由度が向上する。 2)バトンの昇降ストロークは改善されない。 3)屋根改修が出来ない場合の最善策と考えられる。	○ 1)ぶどう棚の新設によるケース①以上の改善効果がある。 2)フライタワーを増築するも想定されるプロセニアム高さ（10m程度）に対して十分なフライの高さは確保できないが（最低25m必要）、側面の壁を拡張することによりバトン長さの拡張、側面反射板の吊り上げ格納スペースの確保が可能で、その効果は大きい。